The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『終わりよければすべてよし』試論 : 病いと治療をめぐって
Author(s)	佐野, 隆弥
Citation	Osaka Literary Review. 1985, 24, p. 49-61
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25532
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『終わりよければすべてよし』試論

—病いと治療をめぐって—

佐　野　隆　弥

『終わりよければ』と共に「問題喜劇」の片翼を担う『以尺報尺』が，今日的問題を抱え込むが故に近年俄に脚光を浴び始めたのに対し，前者は等閑に付されたままの状態にあり，その「不幸せな喜劇」と呼ばれた肩書きを返上するには到っていない。この理由として，結末の開放性，物語の平板さ，あるいは異種の構成要素の不統一性などが指摘されて来た。だが表面的な物語分析や人物批評だけでは，Shakespeare の創作変容期に当たるこの作品を解明するに充分とは言えない。『終わりよければ』に内在する劇的統一と作品のダイナミズムを探る為には「物語」の深層に存在する「語り」としての劇的アクションを追う必要がある。その視点として本論では「病いと治療」という対立項を設定する。

I

ドラマは死のテーマで始まる。

Count. In delivering my son from me, I bury a second husband.
Ber. And I in going, madam, weep o'er my father's death anew ; (I.i.1-4)[1]

すでに死去した父親の後を継いで Rossillion 伯爵となった若き Bertram が，その後見人である France 王に伺候する為，領地を離れようとするこの場面は死と埋葬のイメージで満たされている。希望に溢れ，前途洋々たるべき若き貴族の旅立に暗き影を落とすこれらの心象は，更に王の病いへの言及によって増幅される。王は "fistula" (I.i.31) という難病を患っており，いかなる碩学の医師達ですら癒すことが不可能だと言うのである。

Bertram の旅立が死で色取られるなら，その目指す目的地である France 王は病いで飾られている。これらの形象でこの劇の基調はほぼ固められたと言えるであろう。

続いて Helena がその第一の独白で，Bertram への愛を観客に告白する。

Hel. I am undone ; there is no living, none,
If Bertram be away ;

. . . .

Th' ambition in my love thus plagues itself :
The hind that would be mated by the lion
Must die for love. 'Twas pretty, though a plague,
To see him every hour ; to sit and draw
His arched brows, his hawking eye, his curls,
In our heart's table-heart too capable
Of every line and trick of his sweet favour.
But now he's gone, and my idolatrous fancy
Must sanctify his relics. (I. i. 82-83, 88-96)

彼女の消極的な姿勢を顕著に示すこの独白は，冒頭以来の死と病いのイメージの中にはめこまれており，従って，この台詞を聞く観客の心中にこれらの心象が暗影を落とすのは必定である。しかもその独白自体の内容も，"undone" や "no living" といった言葉によって死の形象が敷衍され，更に88・90行と二度にわたって繰り返される "plague" という語の響きが病的な色彩をこの台詞に添え，観客の意識に Helena とその恋の状態が病んでいるという印象を確立する。そして，この様な Helena の状況を収斂するのが，"idolatrous fancy" という語句である。今はすでに他界した貧しい侍医の娘である Helena は，身分の格差を顧みず若き伯爵の Bertram に叶わぬ愛を捧げる。これを略式化すれば以下の様になるであろう。

Helena's idolatrous fancy …… [her low birth / her one-way love

この病んだ状態に自ら治療を施すべく彼女は行動に移って行くわけであり，

その第一歩が France 王の重病を癒すことになるという次第である。

ところで，以前の消極的な Helena が積極的な人物に発展変身するに際しての観客の異和感を排除し，この人物像変化の転回点をなすのが，彼女の第一独白の直後におかれた Parolles との処女性問答である。元より本劇において「処女性」は中心的な主題の一つであり，その先鞭を付けるのが二人の会話なのである。

Parolles は登場と同時にいささか野卑な機知問答を Helena との間に繰り広げる。消極的に処女を守ろうとする後者に対して，前者は自然の法則に従って生産的な方向へ向うよう忠告を与える。この会話で先ず最初に注目されねばならない点は，以前とは打って変わって Helena があたかも，*Much Ado about Nothing* の Beatrice の如く活発に機知の応酬を行なうことであり，これによって彼女がその第二独白で示す積極性は観客に抵抗なく受け入れられる。次に，この時点まで病いから死へと向う破壊的なヴェクトルが，再生から繁殖増加へと流れる建設的な方向性へと 180度の転回を示していることが指摘され得る。これによっていよいよ劇のダイナミズムが始動するわけであり，Helena の第二独白がそれを確定的なものとする。

Hel. Our remedies oft in ourselves do lie,
Which we ascribe to heaven; the fated sky
Gives us free scope;

. . . .

Impossible be strange attempts to those
That weigh their pains in sense, and do suppose
What hath been cannot be. Who ever strove
To show her merit that did miss her love?
The king's disease - my project may deceive me,
But my intents are fix'd, and will not leave me.

(I. i. 212-14, 220-25)

この台詞に関して G. K. Hunter は次の様に指摘する："The couplets here

seem designed to raise the sense of inevitability and of supernatural confidence."[2] 超自然的な力に守られた，Helena の確固たる積極性は France 王へ "remedy" を施す方向を指向する。と同時に観客の関心も彼女の王に対する治療に集中されてゆく。この点で「治療」がドラマの原動力として作動を開始する。

一幕二場に舞台が進むと病身の France 王が初めて登場し，Helena の父がもし生存していたならその治療を受けることを希望したであろうと述べる。ここで患者である王の側でも「治療」を受ける意志が表明されたと考えることができ，観客の焦点は二人の出会いの方向に合わされてゆく。

ところで，これらの過程において，先ず Helena 自身の美徳が，次いで彼女が父から遺された治療法の超自然的効能が幾度となく強調されてゆく。先ず Helena の美徳をすでに十分よく理解している伯爵夫人は，息子との結婚を暗に認め，更に彼女の Paris 行きについて問いただす。彼女は自分の最終目標は王の治療そのものではなく，Bertram であると答える。つまり王の治療は一つの段階にすぎないわけであり，ここで Helena の自己治療＝王の治療という等式が一応成立する。かくして彼女は「老世代」の一人である伯爵夫人から金銭的，精神的支援を受けて，Paris へと向う。

宮廷に到着した Helena は，その美徳と超自然的治療法によって老貴族 Lafew に感銘を与え，その共感を勝ち取る。そして遂に開幕以来，観客の焦点が合わされてきた王との対面の場となる。予想通り王は Helena の治療を拒むが，観客は比較的安心して劇の流れに身を委ねることができる。なぜなら今まで再三強調されてきた超自然的治療法が観客の心に浸透しているからであり，また多くの研究者が指摘する「おとぎ話」の枠組の効力も見逃がすことはできないであろう。この場面でも Helena は盛んにその超自然的効能を説く。

Hel. Inspired merit so by breath is barr'd.
　It is not so with Him that all things knows
　As 'tis with us that square our guess by shows;

But most it is presumption in us when
The help of heaven we count the act of men.
Dear sir, to my endeavours give consent ;
Of heaven, not me, make an experiment. (II. i. 147-53)

彼女の懸命の説得と処女の名誉を賭けての申し出に，王は Helena の美徳と超自然的療法を認めるようになり，彼女の治療を受ける決心をする。ここで彼女は本劇の「老世代」の中心人物である王の援助を受けることに成功し，夫を与えてもらう約束を取りつける。そして，この段階で「老世代」の人々全てが，Helena の側に立つことになったわけである。

奇跡的に王は回復し，いよいよ Helena の婿選びの場となる。しかし，ここでの彼女は拒絶を恐れて消極的な姿を見せており，もはや超自然性の影も形もなく一人の単なる娘になっている。やがて彼女はBertramを指名するが，彼は彼女の生まれの卑しさを理由に彼女を退け，王の命令を拒否する。そこで王はその理由を無効にする為，Helena に爵位と財産を付与する。

King. 'Tis only title thou disdain'st in her, the which
I can build up.

. . . .

If thou canst like this creature as a maid,
I can create the rest. Virtue and she
Is her own dower ; honour and wealth from me.
(II. iii. 117-18, 142-44)

この結果，事実上，彼女の病いの片方— 'low birth' —は癒されたと考えることができる。実際，劇後半では，彼女は従者を従える身分となっており，また彼女の協力者には多額の礼金を約束していることなどもその証拠と考えてよいであろう。かくして王の病いの治癒と Helena の病いの部分的治療は内容上一致する。

一方，Bertramの方は，今まで不鮮明な人物像しか与えられていなかっ

たが，今回の事件で "Proud, scornful" (II. iii. 151) な悪しき面を暴露したことになる。この様な態度の為，王は遂に激怒し，大権を発して無理矢理Bertramを承服させてしまう。王の祝婚の辞で第一部は終了する。

II

Helenaは名目上Bertramを夫にすることに成功したが，彼の愛情を勝ち得たわけではない，つまり依然，彼女の病いの状態は続いている。一方，結婚に絶望したBertramは腹心の部下であるParollesと謀って戦時下のFlorenceに逃亡し，そこで武勲をたてようとする。更に彼は伯爵家に代々伝わる指輪を彼自身から手に入れ，Helenaの胎から彼を父親とする子供を生んだ場合にだけ，彼女を妻と認めるという課題を記した手紙を送り付ける。

BertramのFlorence行きを知った伯爵夫人は彼を "rash and unbridled boy" (III. ii. 27) と呼んで非難し，一時的にではあるが実子との絶縁を宣言するにまで到る。また，一方ではHelenaを慰め，彼女の美徳を称賛する。ところで伯爵夫人によるこの様なBertram非難，Helena称賛は本劇における「老世代」の対Bertram観，対Helena観を端的に示すものである。前章で検討した様に「老世代」の人々は全てHelenaの美徳を誉め称え，彼女に好意を示している。ところがBertramに対して王はその傲慢さに激怒し，Lafewはその愚かさを見破っている。つまり，彼はHelenaとは逆に「老世代」から好意を受けてはいないように設定されている。「老世代」の人々が健全さと良識を代表し，ある程度までコーラス的役割を果すよう仕組まれている点を考えれば，彼等の人物判断は観客のHelenaやBertramに対する感情移入を先導することになる。より単純化して言えば，観客はHelenaに同化し，Bertramに対しては異化の方向に導かれる。これがShakespeareの意図であることは，その粉本の扱いを調べれば直ちに判明する。『終わりよければ』の主要な種本は，William Painterによる *The Palace of Pleasure* (1566) に収められた物語 "Giletta of Narbona" である

が，その中ではBertramに相当する人物であるBeltramoは同情の余地のある人物とされているからである。そして，これら一連の原作の改変によって，ある重要な観客反応が生起している。それは Helena の病いの未だ癒されていない部分— one-way love —の原因が，実は Bertram の方にあるという考えが無意識的に形成されることである。

Hel. No ; come thou home,
Rossillion,
Whence honour but of danger wins a scar,
As oft it loses all ; I will be gone ;
My being here it is that holds thee hence.
Shall I stay here to do't ? No, no, although
The air of paradise did fan the house
And angels offic'd all. I will be gone,
That pitiful rumour may report my flight
To consolate thine ear. Come, night ; end, day ;
For with the dark, poor thief, I'll steal away. (III. ii. 120-29)

戦地の夫の安全を気遣い，平和に満ちた内地へ呼び戻す為に，自らが家を去ろうとする Helena の優しさと繊細さに溢れたこの台詞は上記の観客反応を決定的なものにする。即ちBertramこそ病いを患っているのだということが観客において確信されるのである。そして，この事は，次の三幕三場でBertramが最悪の病いの状態にいることを自ら語ることで証明される。

Ber. This very day,
Great Mars, I put myself into thy file ;
Make me but like my thoughts and I shall prove
A lover of thy drum, hater of love. (III. iii. 8-11)

Bertramのこの病いは劇の後半を概観した場合，次の三段階に分類される。

(1) 愛の完全なる放棄

(2) 歪んだ形の愛—情欲—への回帰

(3) 相互愛の成就

劇の第二部は彼の病いが極まったところで終了し，第三部ではその治療が展開されるが，その前にこの病いを助長し，また，その治療においても劇構成上大きな機能を果す Parolles について検討しておく。

Parolles は一言で言えば Falstaff を矮小化した人物であり 'miles gloriosus' を代表する一人である。彼は主人の Bertram に対し，その名が暗示する様に "Be more expressive to them [Lords]" (II. i. 51) と忠告する。Bertram はその正体に気付くことなく全き信頼を寄せ，唆しに乗って Helena を捨て Florence へ逃避してしまう。この Parolles の機能を伯爵夫人は端的に指摘する。

Count. A very tainted fellow, and full of wickedness;
My son corrupts a well-derived nature
With his inducement. (III. ii. 87-89)

言葉による "inducement" が彼の生命線である。

ところで，この Bertram とは逆に Helena は彼を "a notorious liar", "a great way fool, solely a coward" (I. i. 98-99) と呼び，最初からその正体を見破っている。Lafew もまた彼の実体を見抜き，一方的に非難し，罵詈雑音を浴びせ掛ける。しかし，奇妙なことに，本来 Helena や Lafew による Parolles への批判は観客の心中に彼の明確な人物像を浮び上がらせるはずであるが，劇前半で実際に舞台上に提示される Parolles の行状がそれらを支えるに充分でない，つまり言葉の描写による Parolles の人物像と舞台上の人物との間にかなりの乖離が生じているのである。従って観客には一種の不審感が募ってくる。しかし，作者の語りは巧みである。なぜなら，観客はこの不審を解消すべく Parolles の言動に注目するはずであり，その結果作者は彼の正体暴露の場面—Parolles がその本領を最もよく発揮し，しかも Bertram の治療に重要な意味を持つ場—へ観客の視点を集中できるからである。

III

第三部の場面は最終場を除き，ほとんどFlorenceで展開される。先ず，三幕五場ではBertram率いるFlorence軍の凱旋を一目見ようと集まった市民達の間で，彼がDianaという娘を口説いていることが報告される。そして，その取持ち役を務めているのは，やはりParollesである。ところが，その彼の様子がおかしい。

Dia. That jackanapes with scarfs. Why is he melancholy?
Hel. Perchance he's hurt i' th' battle.
Par. Lose our drum! Well!
Mar. He's shrewdly vex'd at something. Look, he has spied us.
Wid. Marry, hang you!
Mar. And your curtsy, for a ring-carrier! (III. v. 85-91)

前章でも分析した様にParollesの機能は，"inducement"であり，また悪しき"suggestions" (III. v. 17)である。そして，彼のこの病んだ状態を明瞭に表現するのが"ring-carrier"である。Hunterに拠れば，この語は'bawd'と更には'deceiver'まで意味するとのことである。[3] つまりParollesはBertramの「邪霊」なのである。その彼が"drum"を失なってしまった。T. W. Baldwinも指摘する様に，この"drum"はBertramが三幕三場で軍神Marsに忠誠を誓い，愛を放棄したあの"drum"である。[4] それをBertramの「邪霊」であるParollesが喪失し，その上，彼の取持ちによりBertramはDianaに情欲を抱いている。これらの事からBertramは病いの第一段階から癒されて，第二段階に移項されたことが分かる。

しかし，彼は今なお病んでいる。この段階からHelenaとの相互愛という完全治癒に到るには多くの困難の存在が予想される。そして，この治療を効果的に行なうには，絶対の権威者でありHelenaの完全な支援者である「老世代」の前で是非とも行なわれねばならない。その為にParollesの正体暴露とbed-trickは必要不可欠な前提条件となる。

Parollesの正体を嗅付けた二人のFrance貴族は，Bertramに陣太鼓奪

回に見せ掛けた彼の正体暴露の計画を持ち掛ける。Parollesは案の定この計略にはまり，奪回可能と法螺を吹くが，その見込みは全くなく，自らの舌を呪うばかりである。かくして自己のアイデンティティを否定してしまったParollesの結末は滑稽かつ哀れなものでしかない。彼は奇襲され，目隠しをされて陣営へ連行される。そこで彼は助命と引き換えに当の Bertram や France 貴族が顔前にいるとも知らず，彼等に関する有る事，無い事，思いのままにぶちまけてしまう。更に自らの女衒の機能を否定するかの如く Diana に宛てた Bertram 警告の手紙を発見されたり，果ては主人を裏切るとさえ誓う。ここでようやく Bertram も彼が "a double-meaning prophesier" (IV. iii. 97) であることに気付く。

この場面は本劇中最も楽しい笑劇的な場であるが，同時に正体が暴かれることで，ぺてん師としてのParolles, Bertramの「邪霊」としてのParollesは死ぬ―彼の病んだ状態は癒される―ことになり，一つの象徴的な転機がここに訪れることになる。更に Bradbrook は Parolles の正体露顕が大団円における Bertram のそれを予示するものであることを指摘している。[5)]

では次に bed-trick について検討してみたい。三幕五場で Diana とその母である未亡人から偶然 Bertram の Diana への言い寄りを聞いた Helena は，直ぐ様 bed-trick を思い付き，二人に協力を依頼する。彼女は Diana を使ってBertramの求愛を受け入れることと引き換えに，彼から伯爵家に代々伝わる指輪を得させ，彼に時間と場所と条件を告げさせる。そして，Helena は Diana になり代って Bertram と一夜を共にし，その時に Diana に約束させておいた別の指輪をBertramに与える。この指輪が大団円において Bertram の治療の為に重要な小道具として働く。

ここで Bertram が Diana に譲渡した指輪について考えてみたい。

Ber. It is an honour 'longing to our house,
Bequeathed down from many ancestors,
Which were the greatest obloquy i' th' world
In me to lose. (IV. ii. 42-45)

この台詞で彼が意味する "honour" とは Hunter に拠れば "an extension of *O. E. D.* sb. 6 'a source or cause of honour' " でしかなく，それさえ失うことが彼には "the greatest obloquy" なのである。[6] しかし，観客には彼のこの行為そのものが 'loss of his honourableness' と響くのであり，いかにも彼の病状の深刻さを露呈する発言となる。[7]

ところで興味深いことに，これらの正体暴露と bed-trick は劇中相前後して行なわれる様に設定されている。これは何故か。それはほぼ同時的に Bertram の「邪霊」を追放し，また Diana の上で思いを遂げることができたとBertramに思い込ませることで，実質的に彼が病いの第二段階を抜け出したことを意味する為である。しかも正体暴露の方が前面にでてbed-trick が間接的にしか言及描写されないのは，やはり前者の笑劇的笑いによって後者の持つ暗さを押し隠す意図があるのであろう。

更にこれら一連の場面の中で見落すことが出来ないものに Helena の死の流言がある。これは劇の構成面から考えれば，死んだと思われていた彼女がフィナーレで再登場することで一種の荒療治の作用をBertramに及ぼすことを狙ったものであろう。

最後に為されねばならない治療は王の御前でHelena と Bertram との相互愛を確立することである。

Hel. fore whose [the King's] throne 'tis needful,
Ere I can perfect mine intents, to kneel. (IV. iv. 3-4)

王に面会しようと Helena 一行は懸命に早馬を走らせるが数回失敗したことが報告される。また，一方では Bertram と Lafew の娘との間で婚約が成立する。これらの事件が，Helena の生存を知っている観客の心中に彼女を希求するヴェクトルを生じさせる。

Bertram は Florence から Rossillion へ帰郷する。王は彼に対し，過去の怒りを御破算にし許しを与え，彼の新しい婚約者へ愛の贈り物をするよう命じる。彼は指輪を差し出すが，この指輪は bed-trick の際に Helena

が Bertram に与えたものであり，しかもそれは王が彼女の為に授けたものであった。指輪の出所を尋ねられた Bertram は，苦し紛れに Florence である女が窓から投げてよこしたものだという嘘をつく。王は激怒して，Bertram を殺人の嫌疑で投獄してしまう。今回は単なる王の怒りだけではなく，それに加えて Helena 殺害の容疑，そして投獄という出来事が彼の心に大きな衝撃を与えているはずである。これが最終治療の第一弾となる。

次に王に請願書が届けられ，それに引き続いて Diana と未亡人が登場する。Diana は結婚を餌に処女の操を奪っておきながら，その約束を未だに履行しないと Bertram を訴えるが，彼は Diana を兵隊相手の卑しい娼婦だと罵る。そこで Diana は例の Rossillion 家の指輪を示して彼に反駁し，更には bed-trick の時に彼女が与えた（と Bertram には信じさせてある）指輪を返すよう要求する。これによって先程の Bertram の言逃れは嘘であることが明らかにされたのである。Bradbrook の指摘に拠れば，偽証の罪は特に Elizabeth 朝の貴族にとって社会的抹殺に等しい。[8] この治療の第二弾は決定的である。

Bertram の改心には後は Helena の登場を待つだけでよい。指輪の入手先を問われた Diana は謎をかけながら王をじらし，王の不審が頂点に達したところで Helena を導入する。

Dia. Good mother, fetch my bail. Stay, royal sir;
The jeweller that owes the ring is sent for
And he shall surety me. But for this lord
Who hath abus'd me as he knows himself—
Though yet he never harm'd me—here I quit him.
He knows himself my bed he hath defil'd;
And at that time he got his wife with child.
Dead though she be she feels her young one kick.
So there's my riddle: one that's dead is quick,
And now behold the meaning. (V. iii. 289-98)

死んだと誰しもが思っていた人間が生きた姿を現わす，その奇跡が与える

衝撃は Bertram の完全治癒を確実なものとするに十分である。二つの課題を果した Helena は Bertram に尋ねる。

Hel. Will you be mine now you are doubly won?
Ber. If she, my liege, can make me know this clearly
I'll love her dearly, ever, ever dearly. (V. iii. 308-10)

死んだと思われていた人間が甦り，更にその人間が新たな生命を宿す。死と病いの形象で始まったドラマは，見事なコントラストを見せながら二重の生命力によって幕を下ろそうとしている。Bertramから愛の言葉を勝ち得た Helena には，もはや多くを語る必要は残されていない。ここに描かれているのは，"the fine's the crown." (IV. iv. 35) の世界だからである。

注

1) 『終わりよければすべてよし』からの引用は，すべて *The Arden Shakespeare: All's Well That Ends Well,* ed. G. K. Hunter (Methuen, 1959) に拠る。
2) Hunter, p. 15n.
3) Hunter, p. 87n.
4) Hunter, p. 87n.
5) M. C. Bradbrook, *Shakespeare and Elizabethan Poetry* (Chatto and Windus, 1951), p. 167.
6) Hunter, p. 103n.
7) Bradbrook, p. 168.
8) Bradbrook, p. 163.